

- ③ 補助動詞「ます」の漢字表記は頻度67のうち頻度64が「座」である。
- ④ 前接動詞の判断は宮島 (2015) に拠る。
- ⑤ 多音節音仮名表記も「今悔拭 (いまぞくやしき)」(7・1337) のみではあるがみられる。
- ⑥ 『時代別国語大辞典 上代編』では助動詞25に、「なふ」「めり」「がほし」「まくほし」を加えた29を助動詞とみている。「なふ」「めり」は訓字主体巻でみられないため助動詞の合計数に含めず、「がほし」に対しては「が+ほし」の2語からなるとみて、「まくほし」に対しても「ま+く+ほし」の3語からなるとみて助動詞としない。
- ⑦ 「ものか」を含む。
- ⑧ 活用語尾や助動詞、接辞、種々の品詞の連続で合計出現頻度が低いために、計量的にみるものができなかったものとして次のようなものがある。活用語尾「荒振公乎 (あらぶるきみを)」(4・556) / 「神左振 (かむさぶる)」(7・1130) / 「得于蚊将去 (うかれかゆかむ)」(11・2646) / 「思足橋 (おもひたらはし)」(13・3258) / 「念足橋 (おもひたらはし)」(13・3276)。助動詞「空消生 (そらにけなまし)」(12・2896)。接辞「戀為便名履 (こひすべながり)」(12・3034)。連続「無恙行核 (さきくいまさね)」(12・3204) / 「於毛保寒蟲 (おもほさむかも)」(4・654) / 「見乍 惣食 (みつつしのはむ)」(7・1106) / 「吾社湯龜 (われこそゆかめ)」(12・2931) / 「日本思櫃 (やまとしのひつ)」(3・367) / 「久雲在 (ひさしくもあらむ)」(10・1901) / 「戀八九良三 (こひやくらさむ)」(10・1925) / など。

#### 【参考文献】

- 稲岡耕二 (1967) 「万葉集における単語の交用表記について」『国語学』70: pp. 19-45, 稲岡耕二 (1976) 『万葉表記論』塙書房: pp. 505-563.
- 春日和男 (1960) 『「ます」及びその類語の発生と展開』『国文学 解釈と教材の研究』5 (2): pp. 150-155.
- 木下正俊 (編) (2001) 『万葉集 CD-ROM 版』塙書房
- 古典索引刊行会 (編) (2003) 『万葉集索引』塙書房
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
- 寺島利尚 (1994) 「人麻呂歌集歌の多音節借訓と語構成」『東洋』31 (6): pp. 16-27.
- 橋本四郎 (1966) 「多音節仮名」澤瀉博士喜寿記念論文集刊行会 (編) 『澤瀉博士喜寿記念万葉学論叢』: pp. 641-671, 橋本四郎 (1986) 『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店: pp. 43-62.
- 蜂矢宣朗 (1960) 「万葉集における活用語尾の表記——動詞の部——」『山辺道』6: pp. 56-73.
- 蜂矢宣朗 (1961) 「万葉集における活用語尾の表記——形容詞の部——」『山辺道』7: pp. 46-61.
- 蜂矢真郷 (2012) 「上代の形容詞」『万葉』212: pp. 1-35, 蜂矢真郷 (2014) 『古代語形容詞の研究』精文堂出版: pp. 69-141.
- 宮島達夫 (編) (2015) 『万葉集巻別対照分類語彙表』笠間書院
- 山口佳紀 (1993) 『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版: pp. 248-271.
- 山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』宝文館: p. 541.
- 吉岡真由美 (2015a) 『万葉集』における多音節助詞の表記』『同志社国文学』82: pp. 201-212.
- 吉岡真由美 (2015b) 「多音節訓仮名表記されることがある語句——『万葉集』における実態と傾向——」『同志社日本語研究』19: pp. 12-24.
- 吉田金彦 (1973) 「記紀・万葉の敬語」林四郎, 南不二男 (編) 『上代・中古の敬語』敬語講座2 明治書院: pp. 31-72.

ではないことにふれた。【表5】においても〈下〉〈霜〉〈西〉など複数と対応するものが確認でき、多音節訓仮名として出現する〈漢字〉には、それとして出現しやすいものがあると推測される。

#### 4 おわりに

本稿では、多音節訓仮名表記されることがある補助動詞・活用語尾・助動詞・助詞・接辞およびこれらの連続<sup>⑧</sup>について、(1)多音節訓仮名表記の実態 (2)多音節訓仮名表記されやすいものの特徴、について調査・検討してきた。

(1)については、補助動詞では複数ある補助動詞のなかで「ます」においてのみ多音節訓仮名表記がみられ、そのほとんどは前接動詞が「く[来]」のときに確認された。シク活用形容詞語尾では、その表記の中心が読添え・混合表記であるなかで、多音節訓仮名表記は語幹の構成要素と「シ(ジ)」との結合が強固でないと推測される形容詞において多音節訓仮名表記がみられることを確認した。単独の助動詞では、多音節訓仮名表記が「つる(つ・体)」「まし(まし・体)」にとくに多いこと、異なる活用形で同じ形をとっていても多音節訓仮名表記の比率に開きがあることを確認した。種々の品詞の連続では「けらし(けらし・終)+も」「らし(らし・終)+も」「ま(む・未)+く」「く+に」で多音節訓仮名表記が多くみられた。

(2)については、補助動詞・助動詞・種々の品詞の連続では固定化した用法を持つものにおいて多音節訓仮名表記が多いという特徴がみられた。また、シク活用形容詞語尾では、語幹の構成要素と「シ(ジ)」との結合が強固でないと思われる形容詞で多音節訓仮名表記がみられることを確認した。本稿の調査で得たこれらの特徴が、『萬葉集』において多音節訓仮名の出現を支える要因のひとつとまでいえるかどうかについては、さらなる検討を要する。

本稿では、多音節訓仮名として出現する〈漢字〉について詳しくふれられなかった。多音節訓仮名として出現する〈漢字〉には〈鳴〉のように特定の活用形とのみ対応するものがあるいっぽうで、〈益〉〈下〉〈霜〉〈西〉をはじめとして複数の語と対応するものがある。このことから、多音節訓仮名として出現しやすい〈漢字〉があったものと思われる。

#### 注

- ① 拙稿(2015b)でシク活用形容詞の「シ」を、便宜上、活用語尾として扱うことを述べた。
- ② 『万葉集索引』では「垣保成(かきほなす)」(9・1793)の「なす」も補助動詞とされているが、本稿では接辞とする。

【表5】連続の表記の実態

連 続	〈漢字〉	合計 頻度	多訓 頻度	比率	漢字 頻度	比率	単音節 頻度	比率	読添え 頻度	比率	混合 頻度	比率	その他 頻度	比率
助動詞+助動詞	-	171	34	0.198	-	-	30	0.175	18	0.105	66	0.385	23	0.134
さ(ず・未)+む(む・終)	寒	8	1	0.125	-	-	1	0.125	1	0.125	3	0.375	2	0.250
な(ぬ・未)+む(む・終)	嘗	28	2	0.071	-	-	4	0.142	1	0.035	16	0.571	5	0.178
な(ぬ・未)+む(む・体)	嘗	51	1	0.019	-	-	8	0.156	3	0.058	23	0.450	16	0.313
に(ぬ・用)+し(き・体)	西	76	27	0.355	-	-	16	0.210	11	0.144	22	0.289	-	-
に(ぬ・用)+しか(き・已)	西	8	3	0.375	-	-	1	0.125	2	0.250	2	0.250	-	-
助詞+助詞	-	326	84	0.257	6	0.018	109	0.334	24	0.073	96	0.294	7	0.021
し+か	鹿・然	8	2	0.250	-	-	-	-	4	0.500	2	0.250	-	-
し+もが	霜	4	2	0.500	-	-	-	-	1	0.250	1	0.250	-	-
と+し	年・歳	11	4	0.363	-	-	4	0.363	-	-	3	0.272	-	-
と+の	殿	3	1	0.333	-	-	-	-	-	-	2	0.666	-	-
と+も	友	15	4	0.266	-	-	6	0.400	-	-	1	0.066	4	0.266
に+し	西	41	15	0.365	-	-	18	0.439	5	0.121	3	0.073	-	-
に+は	庭	152	38	0.250	-	-	47	0.309	10	0.065	57	0.375	-	-
は+しも	橋	8	1	0.125	-	-	1	0.125	-	-	5	0.625	1	0.125
ば+か	墓	4	1	0.250	-	-	3	0.750	-	-	-	-	-	-
もが+も	鴨	48	13	0.270	6	0.125	8	0.166	-	-	21	0.437	-	-
を+し	鴛・食	32	3	0.093	-	-	22	0.687	4	0.125	1	0.031	2	0.062
助動詞+助詞	-	120	48	0.400	-	-	51	0.425	7	0.058	14	0.116	-	-
けらし(けらし・終)+も	下・霜	15	8	0.533	-	-	7	0.466	-	-	-	-	-	-
に(なり・用)+し	西	42	14	0.333	-	-	22	0.523	5	0.119	1	0.023	-	-
に(なり・用)+は	庭	20	3	0.150	-	-	6	0.300	2	0.100	9	0.450	-	-
ぬ(ず・未)+か	櫻・額	21	7	0.333	-	-	10	0.476	-	-	4	0.190	-	-
らし(らし・終)+も	下・霜	22	16	0.727	-	-	6	0.272	-	-	-	-	-	-
助動詞+接辞	-	274	63	0.229	-	-	20	0.072	32	0.116	154	0.562	5	0.018
べ(べし・語幹)+み	蛇	10	1	0.100	-	-	-	-	-	-	9	0.900	-	-
し(き・体)+く	敷	9	1	0.111	-	-	6	0.666	-	-	2	0.222	-	-
な(ず・未)+く	鳴	149	1	0.006	-	-	10	0.067	1	0.006	137	0.919	-	-
ま(む・未)+く	巻・纏	106	60	0.566	-	-	4	0.037	31	0.292	6	0.056	5	0.047
接辞+助詞	-	189	74	0.391	-	-	27	0.142	16	0.084	62	0.328	10	0.052
く+に	國	145	59	0.406	-	-	24	0.165	12	0.082	40	0.275	10	0.068
く+も	雲	44	15	0.340	-	-	3	0.068	4	0.090	22	0.500	-	-

以上にみた、「助動詞+助動詞」「助詞+助詞」「助動詞+助詞」「助動詞+接辞」「接辞+助詞」の表記の実態を整理すると【表5】のようである。多音節訓仮名表記の比率は、もっとも高い「らし(らし・終)+も」では0.727であるのに対して、「な(ず・未)+く」では0.006とかなりの幅がある。多音節訓仮名表記の比率が高いのは、「らし(らし・終)+も」0.727、「けらし(けらし・終)+も」0.533、「ま(む・未)+く」0.566、「く+に」0.405などであり、これらは「定異等霜(さだめけらしも)」(6・1051)、「家思良下(いへおもふらしも)」(7・1191)、「挂巻毛(かけまくも)」(13・3234)、「家母不有國(いへもあらなくに)」(8・1636)と、いずれも固定化した用法である。

なお、3.3節で多音節訓仮名として出現する〈漢字〉と助動詞との対応関係が1対1

## • 助動詞+助動詞

- さ (す・未)+む (む・終) ……神祇毛知寒 (かみもしらさむ) 邑礼左變 (4・655)  
 な (ぬ・未)+む (む・終) ……吾波乞咎 (あれはこひなむ) 君尔不相鴨 (3・380)  
 な (ぬ・未)+む (む・体) ……不視歟成咎 (みずかなりなむ) 戀布真國 (9・1722)  
 に (ぬ・用)+し (き・体) ……忘西 (わすれにし) 其黄葉乃 所思君 (10・2184)  
に (ぬ・用)+しか (き・已) ……入日成 隱西加婆 (かくりにしかば) …… (2・213)

## • 助詞+助詞

- し+か 何時然跡 (いつしかと) 待牟妹尔 玉梓乃 事太尔不告 往公鴨 (3・445)  
し+もが ……萬代尔 如是霜願跡 (かくしもがもと) …… (6・920)  
 と+し ……開去歲 (あけぬとし) 立動良之 率兒等…… (3・388)  
 と+の 皆人乎 宿与殿金者 (ねよとのかねは) 打礼杼…… (4・607)  
 と+も ……逝水之 時友無雲 (ときともなくも) 戀度鴨 (11・2704)  
 に+し ……零雪乃 行者不去 待西将待 (まちにしまたむ) (6・1041)  
 に+は ……其日左右庭 (そのひまでには) 山下之…… (9・1751)  
は+しも ……日尔異尔益 何時橋物 (いつはしも) …… (13・3329)  
 ば+か 吾背子尔 復者不相香常 思墓 (おもへばか) …… (4・540)  
もが+も ……白玉 人不知 見依鴨 (みむよしもがも) (7・1300)  
 を+し ……哀我 手鴛取而者 (てをしとりてば) 花散鞆 (7・1259)

## • 助動詞+助詞

- けらし (けらし・終)+も ……大宮處 定異等霜 (さだめけらしも) (6・1051)  
 に (なり・用)+し ……貴物者 酒西有良之 (さけにしあるらし) (3・342)  
 に (なり・用)+は 今耳之 行事庭不有 (わざにはあらず) …… (4・498)  
 ぬ (ず・体)+か ……妹之手本 伊行觸梗 (いゆきふれぬか) (10・2320)  
らし (らし・終)+も ……馬曾爪突 家戀良霜 (いへこふらしも) (3・365)

## • 助動詞+接辞

- べ (べし・語幹)+み 秋芽子乎 落過沼蛇 (ちりすぎぬべみ) …… (10・2290)  
 し (き・体)+く ……打経而 思煎敷者 (おもへりしくは) …… (6・1047)  
 な (ず・未)+く ……酌尔雖行 道之白鳴 (みちのしらなく) (2・158)  
 ま (む・未)+く ……人之芍薺 (ひとのからまく) 惜昔原 (7・1341)

## • 接辞+助詞

- く+に ……雲居尔也 戀管将居 月毛不經國 (つきもへなくに) (4・640)  
 く+も 天河 渡湍毎 思乍 来之雲知師 (こしくもしるし) 逢有久念者 (10・2074)

体)」0.083, のように低いものもみられる。多音節訓仮名表記の比率が低いものは漢字表記を持つものであり, その漢字表記は「山尔生有(やまにおひたる)」(4・580)の「有」や「消去之如久(けぬるがごとく)」(3・466)の「去」など, 語源を反映したと考えられるものである。『萬葉集』は漢字表記を志向していることから, 漢字表記が可能な助動詞において多音節訓仮名表記が少ないという結果は当然ともいえる。そこで以下は, 多音節訓仮名表記の比率が高い「つる(つ・体)」「まし(まし・体)」に焦点をあて, 多音節訓仮名表記を促す原因について検討したい。

「つる(つ・体)」においてまず指摘できることは, その出現のしかたおよび出現位置が非常に固定的ということである。「つる(つ・体)」は合計出現頻度71のうち頻度35が「挿頭鶴鴨(かざしつるかも)」(8・1581)のように終助詞「かも」を伴って文末に出現し, 頻度25は「人曾言鶴(ひとぞいひつる)」(3・420)のように係助詞をうけての連体形終止用法として出現する。両者の合計は8割( $0.845 = (35 + 25) / 71$ )を越えており, 「つる(つ・体)」は文末であることを示す標識のようなはたらきをしている。出現の固定化という傾向は, 「まし(まし・体)」においても指摘できる。「まし(まし・体)」は合計出現頻度93のうち頻度53が「卷手宿益乎(まきてねましを)」(6・1036)のように「ましを」であり, 頻度28が「聞益物乎(きかましものを)」(10・2148)の「ましものを」およびそれに類する形<sup>⑦</sup>で出現する。両者の合計は9割弱( $0.870 = (53 + 28) / 93$ )にのぼることから, 「まし(まし・体)」の大部分は「ましを」あるいは「ましものを」という類型の一部として出現しているといえる。「まし(まし・終)」も多音節訓仮名表記がみられるが, その比率は0.250と低い。これは, 「まし(まし・終)」に「まし(まし・体)」のような固定化した用法がみられないことに拠るものと思われる。

すでに述べたとおり, 橋本(1966)は多音節訓仮名には語的なまとまりや文節を明示する機能があると指摘している。「つる(つ・体)」や「まし(まし・体)」に多音節訓仮名表記が多いのも, この語的なまとまりを示す機能が関係しているであろう。ただし, 「まし(まし・体)」0.645, 「まし(まし・終)」0.250のように, 活用形によって多音節訓仮名表記の比率に開きがみられるものがあり, 両者は固定化した用法があるか否かという点に差異がみられる。助動詞の多音節訓仮名表記は固定化した用法を持つものにおいて多くなされており, このことから, 固定化した用法の有無が助動詞の多音節訓仮名表記の多少に影響していると考えられる。

### 3.4 連続

ここでは, 種々の品詞の連続である「助動詞+助動詞」「助詞+助詞」「助動詞+助詞」「助動詞+接辞」「接辞+助詞」について表記の実態をみる。

【表4】単独の助動詞の表記の実態

単独の助動詞	〈漢字〉	合計			漢字		単音節		読添え		混合		その他	
		頻度	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
全体	-	411	154	0.374	110	0.267	92	0.223	31	0.075	20	0.051	3	0.007
しか(き・已)	鹿・然・敷	24	3	0.125	-	-	12	0.500	2	0.083	6	0.250	1	0.041
しめ(しむ・命)	染	1	1	1.000	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
たる(たり・体)	足・垂	89	6	0.067	78	0.876	1	0.011	3	0.033	-	-	1	0.011
たれ(たり・已)	垂	12	1	0.083	7	0.583	1	0.083	3	0.250	-	-	-	
つる(つ・体)	鶴・釣	71	55	0.774	-	-	14	0.197	1	0.014	1	0.014	-	
なら(なり・未)	檣	19	1	0.052	15	0.789	1	0.052	2	0.105	-	-	-	
なり(なり・終)	成	23	7	0.304	-	-	15	0.652	1	0.043	-	-	-	
なる(なり・体)	成・鳴	25	11	0.440	-	-	13	0.520	1	0.040	-	-	-	
ぬる(ぬ・体)	塗・染	24	2	0.083	3	0.125	2	0.083	4	0.166	12	0.500	1	0.041
ませ(まし・未)	益	9	1	0.111	-	-	4	0.444	4	0.444	-	-	-	
まし(まし・終)	益・増	12	3	0.250	-	-	7	0.583	1	0.083	1	0.083	-	
まし(まし・体)	益・猿・猿	93	60	0.645	3	0.032	21	0.225	9	0.096	-	-	-	
ましじ(ましじ・終)	益・申	9	3	0.333	5	0.444	1	0.111	1	0.111	-	-	-	

代別国語大辞典 上代編<sup>⑥</sup>に見出し語として立項されている助動詞は25語であるから、多音節訓仮名表記されることがあるものは約3.5割(0.360=9/25)である。単独の助動詞では多音節訓仮名表記されることがあるものが約7割であるという、拙稿(2015a)の結果をふまれば、単独の助詞に比して単独の助動詞は多音節訓仮名表記されにくいといえる。橋本(1966)は助動詞に活用があるために多音節訓仮名表記が定着しにくいと指摘している。ただし【表4】における助動詞と〈漢字〉の対応をみると、〈鳴〉は「なる(なり・体)」の多音節訓仮名表記としてみられるのに対して「なり(なり・終)」の多音節訓仮名表記としてはみられず、「しか(き・已)」の多音節訓仮名表記に対しては〈鹿〉〈然〉〈敷〉という異なる3つの〈漢字〉が確認できる。このことから、助動詞1語に対して多音節訓仮名1つという関係ではなく、異なる活用形においては異なる多音節訓仮名で表記するということが可能であるといえる。したがって、助動詞が活用をするということが直接的に多音節訓仮名表記の定着を妨げる原因と考えられるかどうかについては、さらなる検討を要する。また、「まし(まし・終)」と「まし(まし・体)」とは異なる活用形で同じ形をとるにもかかわらず、多音節訓仮名表記の比率に大きな開きがある。これらをふまえると、助動詞の多音節訓仮名表記の多少には活用とは別の事柄が影響を与えている可能性が考えられる。

【表4】の「全体」をみると、多音節訓仮名表記の比率がもっとも高い0.374であり、以下、漢字表記0.267、単音節仮名表記0.223、読添え0.075、混合表記0.051、その他の表記0.007が続く。助動詞それぞれの多音節訓仮名表記の比率をみると、「つる(つ・体)」0.774、「まし(まし・体)」0.645においては非常に高いいっぽうで、「なら(なり・未)」0.052、「たる(たり・体)」0.067、「たれ(たり・已)」0.083、「ぬる(ぬ・

(わびしみせむと)」（4・641）、「云者忌染（いはばゆゆしみ）」（10・2275）のように、「シ」+「ミ」を多音節訓仮名「染」で表記するものがある。このような表記がみられるシク活用形容詞は、「かなし [悲・愛]」「こほし [恋]」「なつかし [懐]」「めづらし [珍]」「ゆゆし [由由]」「わびし [侘]」の6語であり、これらのうち「かなし [悲・愛]」「わびし [侘]」を除く4語はさきに挙げた活用語尾が多音節訓仮名表記されることがある12語でもある。また、「わびし [侘]」はさきにふれた「こひし [恋]」「ときじ [時]」と同様に、名詞「わび [侘]」からの派生形容詞である。こうした点からも、語尾が多音節訓仮名表記されることがあるシク活用形容詞は、語幹の構成要素と「シ(ジ)」との結合が強固ではなかったと推測される。

### 3.3 助動詞

多音節訓仮名が助動詞と対応する際には、その助動詞が単独であるばあいと助動詞の連続の全体または部分であるばあいが確認できる。ここでは前者の単独の助動詞について述べ、助動詞の連続については3.4節で扱う。

多音節訓仮名表記されることがある単独の助動詞は下記のとおりである。「しか(き・已)」ならば、多音節訓仮名が対応するのは「しか」で、それは助動詞「き」の已然形であることを意味している。なお、「なら(なり・未)」は断定の助動詞、「なり(なり・終)」「なる(なり・体)」は伝聞・推定の助動詞である。

しか(き・已)	焼津邊 吾去鹿齒(わがゆき <u>しか</u> ば) 駿河奈流…… (3・284)
しめ(しむ・命)	……妹乎目不離 相見 <u>染</u> 跡衣(あひ <u>みしめ</u> とそ) (3・300)
たる(たり・体)	……奥津藻毛 靡足波尔(な <u>みたる</u> なみに)…… (2・162)
たれ(たり・已)	玉手次 不懸者辛苦 懸 <u>垂</u> 者(かけ <u>たれば</u> )…… (12・2992)
つる(つ・体)	……将死与妹常 夢所見鶴(いめに <u>みえつる</u> ) (4・581)
なら(なり・未)	……越懈乃 子難懈乃 嶋檜名君(しま <u>なら</u> なくに) (12・3166)
なり(なり・終)	……乳鳥鳴成(ちどり <u>なくなり</u> ) 孀待不得而 (3・268)
なる(なり・体)	暮不去 河蝦鳴成(かは <u>づ</u> なくなる)…… (10・2222)
ぬる(ぬ・体)	……日月之 數多成塗(まね <u>くなりぬる</u> )…… (2・167)
ませ(まし・未)	……四我良美渡之 塞 <u>益</u> 者(せか <u>ませ</u> ば)…… (2・197)
まし(まし・終)	……此間毛有益(ここにも <u>あらし</u> ) 柘之枝羽裳 (3・387)
まし(まし・体)	……消蟲死 <u>爰</u> (けかもし <u>まし</u> ) 戀乍不有者 (10・2258)
<u>まし</u> じ(ましじ・終)	……戀乃増者 在勝申自(ありか <u>つまし</u> じ) (11・2702)

上記の助動詞について、表記の実態を整理すると【表4】のようである。

【表4】に整理した助動詞13は、終止形に基づいて9語にまとめることができる。『時



## し [由由]

語幹に漢字表記のみ確認できるものは、「おもほし [思]」「くやし [悔]」「こひし [恋]」「こほし [恋]」「ときじ [時]」の5語である。ただし、『萬葉集 CD-ROM 版』で「こほし [恋]」と訓まれたものの多くが『萬葉集索引』では「こひし [恋]」に改訓されているように、「こほし [恋]」は「こひし [恋]」に統合してよく、実質的には4語である。これら4語のうち、「こひし [恋]」は動詞「こふ [恋]」連用形からの派生形容詞ともみられるが、名詞「こひ [恋]」からの派生形容詞ともみられる。「ときじ [時]」はいわゆるジ型形容詞で、ジ型形容詞の構成は山田 (1954)、蜂矢 (2012) などですでにいわれているとおり、基本的に名詞 (代名詞)+「ジ」である。つまり、「こひし [恋]」「ときじ [時]」はともに、語としての独立性が高い名詞をその語幹の構成要素に持っている。また、山口 (1985) は転成名詞を含む名詞からの派生形容詞が上代に少なく平安時代以降に増加することから、こうした形容詞の出自が比較的新しいものであろうと指摘している。「おもほし [思]」は動詞からの派生形容詞であり、「おもほ」は語としての独立性がない。しかし、蜂矢 (2012) が4音節形容詞は比較的新しい時期に派生した可能性があることを指摘しており、「こひし [恋]」「ときじ [時]」と同様に、出自の新しさという特徴を備えている。つまり、「こひし [恋]」「ときじ [時]」「おもほし [思]」は語幹の構成要素の独立性の高さや出自の新しさのために、語幹を構成する要素と「シ (ジ)」との結合が強固ではなかった。それが原因で、活用語尾が語幹とは異なるままとまりとして捉えられ、多音節訓仮名表記されたと考えられることができる。

いっぽう、動詞「くゆ [悔]」からの派生形容詞である「くやし [悔]」は、「くやし」に語としての独立性もなく、それ自体の出自の新しさも認められない。動詞「くゆ [悔]」は『萬葉集』において複合動詞も含めた頻度が3と低く、「くやし [悔]」が活用語尾の表記によって積極的に動詞「くゆ [悔]」との誤読回避を図らなければならなかったとも考えにくい。稲岡 (1967) は語や時代、表記者によって「シ (ジ)」を語幹とみなすか否かには多少の揺れがあった可能性を述べており、「くやし [悔]」の多音節訓仮名表記についても現時点ではそのように考えておきたい。

以上、「くやし [悔]」は例外であるものの、「こひし [恋]」「ときじ [時]」「おもほし [思]」における活用語尾の多音節訓仮名表記は、語幹の構成要素と「シ (ジ)」との結合が強固ではない点に求めることができるであろうことを述べた。ところで、シク活用形容詞には「シ (ジ)」までを語幹としてそれに接尾語「ミ」を伴ういわゆるミ語法がある。その表記は原則として読添え「散卷惜 (ちらまくを<sup>シ</sup>み)」(10・1957) か、混合表記「命乎惜美 (いのちを<sup>シ</sup>み)」(1・24) である。しかし、一部に「和備染責跡



【表3】シク活用形容詞語尾の表記の実態

形容詞	〈漢字〉	合計			漢字		単音節		混合		読添		その他	
		頻度	多訓頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
全	体	258	35	0.135	-	-	27	0.104	153	0.593	42	0.162	1	0.003
未	敷	31	2	0.064	-	-	8	0.258	14	0.451	7	0.225	-	-
用	敷・布	81	7	0.086	-	-	8	0.098	57	0.703	9	0.111	-	-
体	敷・布	139	26	0.187	-	-	11	0.079	75	0.539	26	0.187	1	0.007
已	-	7	-	-	-	-	-	-	7	1.000	-	-	-	-

活用のそれを除いている。

「全体」行は、シク活用形容詞の未然形・連用形・連体形・已然形の活用語尾をひとつのまとまりとみたときの頻度と比率である。読添えの比率0.593がもっとも高く、以下、混合表記0.162、多音節訓仮名表記0.135、単音節仮名表記0.104、その他の表記0.003の順で続いている。読添えの比率が突出して高いのは、蜂矢（1960）のいう活用の語尾は表記しないという傾向がシク活用形容詞の表記全体に貫かれているからである。混合表記は2.2節で述べたように、「シ（ジ）」を無表記とし「ケ」「ク」「キ」を表記するものである。読添えとそれに次ぐ混合表記でおおよそ7.5割（ $0.755 = (153 + 42) / 258$ ）を占めることから、シク活用形容詞の「シ（ジ）」は表記しないという傾向を看取できる。

そうした傾向に反して、少数ながらも活用語尾「シ（ジ）ケ」「シ（ジ）ク」「シ（ジ）キ」を表記することがある。蜂矢（1961）はその原因として、(A) 語幹が単音節仮名表記・多音節訓仮名表記である (B) 擬音語・擬態語から派生したと考えられる (C) 形容詞語幹の漢字表記が動詞語幹の漢字表記でもあることから誤読をさけるためである (D) 語幹の独立用法が発達している、の4点を指摘する。シク活用形容詞の語尾を2音節にわたって表記するには単音節仮名表記と多音節訓仮名表記<sup>⑤</sup>とがあり、前者は「波之吉佐寶山（はしきさほやま）」（3・474）、「常目頼次吉（とこめづらしき）」（11・2651）のように、蜂矢（1961）の指摘（A）が原因と思われるものが多数を占める。いっぽう後者の多音節訓仮名表記は、語幹が多音節訓仮名表記のばあいに加えて漢字表記のばあいにもしばしば確認できることから、蜂矢（1961）の指摘（C）（D）に、すなわち、形容詞の語幹に対する語構成意識に関わっていると考えられる。

【表3】にまとめたシク活用形容詞は44語あり、そのうち活用語尾が多音節訓仮名表記されることがあるものは下記の12語である。語幹の表記に多音節訓仮名表記がみられることがあるものには下線を施している。

うつし [現] / おもほし [思] / くやし [悔] / ごごし [陰] / こひし [恋] / こほし [恋] / とくじ [時] / ともし [乏・羨] / なつかし [懐] / はし [愛] / めづらし [珍] / ゆゆ

【表2】前接動詞と補助動詞「ます」の表記

前接動詞	合計	漢字	多訓	単音節	読添え	混合
全体	110	66	24	5	14	1
あもる [天降]	1	1	-	-	-	-
ある [生]	2	2	-	-	-	-
いづ [出]	4	3	-	1	-	-
いはぐる [岩隠]	1	1	-	-	-	-
いる [入]	1	1	-	-	-	-
おもふ [思]	1	1	-	-	-	-
かくる [隠]	1	-	1	-	-	-
かへる [帰]	3	1	1	1	-	-
かる [刈]	1	-	-	1	-	-
く [来]	66	32	20	-	14	-
くもがくる [雲隠]	1	1	-	-	-	-
こえく [越来]	1	-	1	-	-	-
こゆ [越]	1	1	-	-	-	-
こゆ [肥]	1	1	-	-	-	-
しく [敷]	7	7	-	-	-	-
したひく [慕来]	1	1	-	-	-	-
しづまる [鎮・静]	1	1	-	-	-	-
たかしる [高知]	2	2	-	-	-	-
たつ [立]	1	-	-	-	-	1
ふとしく [太敷]	3	3	-	-	-	-
まく [枕]	2	2	-	-	-	-
みる [見]	4	2	-	2	-	-
わたりく [渡来]	1	1	-	-	-	-
をつ [変若]	1	-	1	-	-	-
しる [知]+す (助動)	1	1	-	-	-	-
たる [足]+す (助動)	1	1	-	-	-	-

ことから、補助動詞「ます」の多音節訓仮名表記には、補助動詞「ます」の用法の固定化が密接に関わっていると考えられる。

### 3.2 活用語尾

ここでは形容詞活用語尾の表記についてみる。多音節訓仮名表記されることがあるシク活用形容詞の語尾は次のとおりである。シク活用形容詞語尾と対応する多音節訓仮名には「敷」「布」があるが、挙例に際しては「敷」のみを記す。以下も同様で、異なる複数の多音節訓仮名での表記が確認できるものについては、そのうちのひとつを挙例し、詳細は表の中の〈漢字〉列に記す。

しけ (未) ……鏡山 不見久有者 戀敷牟鴨 (こひしけむかも) (3・311)

しく (用) 味凍 綾丹乏敷 (あやにともしく) 鳴神乃 音耳聞師…… (6・913)

しき (体) 磐金之 凝敷山乎 (こごしきやまを) 超不勝而…… (3・301)

シク活用形容詞語尾の表記の実態は【表3】のようである。多音節訓仮名での表記が不可能な終止形、活用が確認できない命令形は表から外し、各活用形の頻度からは補助

【表1】 補助動詞「ます」の表記の実態

補助動詞〈漢字〉	活用	合計			多訓		漢字		単音節		混合		読添		その他	
		頻度	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率		
ます	-	110	24	0.218	67	0.609	5	0.045	1	0.009	13	0.118	-	-		
益	未	47	13	0.276	22	0.468	1	0.021	-	-	11	0.234	-	-		
益	用	16	2	0.125	14	0.875	-	-	-	-	-	-	-	-		
益	終	7	2	0.285	3	0.428	1	0.142	-	-	1	0.142	-	-		
益	体	9	1	0.111	8	0.888	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	已	2	-	-	1	0.500	1	0.500	-	-	-	-	-	-		
益	命	29	6	0.206	19	0.655	2	0.068	1	0.034	1	0.034	-	-		

名として出現する〈漢字〉を記している。「多訓」は多音節訓仮名の略称である。

【表1】では漢字表記の比率0.609がもっとも高く、続く多音節訓仮名表記0.218、読添0.118、単音節仮名表記0.045、混合表記0.009とは大きな開きがある。しかし、「ます」に限らず補助動詞の表記は原則として実質動詞に由来する漢字表記であり、その漢字表記は非常に固定的である<sup>③</sup>。したがって注目すべきは、漢字表記の比率が高いことではなく、固定的な漢字表記があるにもかかわらず多音節訓仮名表記の比率が0.218を占めていることである。

固定的な漢字表記を持っている語句においても多音節訓仮名表記がみられ、それにはある語が類型表現として固定化することが関係している可能性があることを拙稿(2015b)で指摘した。補助動詞「ます」は漢字表記の比率が突出して高いことが示すように固定的な漢字表記を持っている。また、補助動詞「ます」に前接する動詞には「く[来]」が多いことが吉田(1973)によって指摘されており、「く[来]」+補助動詞「ます」という類型があったと考えられる。このような補助動詞「ます」の実態は、多音節訓仮名表記されることがある語句の様相と類似していることから、補助動詞「ます」の多音節訓仮名表記にもその用法の固定化が関与していると推測される。

上記の推測を確認するために、前接動詞と補助動詞「ます」の表記を整理すると【表2】のようになる。合計出現頻度110のうち66は前接動詞が「く[来]」であり、「く[来]」+補助動詞「ます」は『萬葉集』においてすでにより固定化した用法であったといえる。これは春日(1960)が平安時代以降の「ます」には熟合用法が多くなると指摘し、その例として「きます」が挙げられていることから肯定されよう。また、補助動詞「ます」の前接動詞26語のうち、多音節訓仮名表記がみられるのは「かくる[隠]」「かへる[帰]」「く[来]」「こえく[越来]」「をつ[変若]」の5語のみである。「全体」の多音節訓仮名表記の頻度は24あり、そのうち頻度20は前接動詞「く[来]」においてみられる。さきの推測のとおり、「く[来]」+補助動詞「ます」は固定化した用法であり、その固定化した用法のほかに多音節訓仮名表記のほとんどが確認される。以上の

くります)」(3・441)の「座」である。義訓は「たる(たり・体)」に対する「繁生有(しじにおひたる)」(3・324)の「有」,「まし(まし・体)」に対する「可死鬼乎(しなましものを)」(11・2765)の「可」, (3・431)の「ましじ(ましじ・終)」に対する「不可忘(わすらゆましじ)」(3・431)の「不可」などである。

【単音節仮名表記】1字が1音節に対応する音仮名・訓仮名での表記。『時代別国語大辞典 上代編』の「主要万葉仮名一覧表」に記載されているものを単音節仮名とする。「有勝麻之自(ありかつましじ)」(2・94)／「君乎之将待(きみをしまたむ)」(11・2538)

【読添え】多音節訓仮名表記されることがある部分が無表記であり、補読を必要とするもの。□が補読部分である。本稿は多音節訓仮名表記の側からほかの表記との関係を探えようとしている。そのため、形容詞語尾<sup>①</sup>の無表記も読添えとして処理する。「悔事乃(くやしきことの)」(3・420)／「公待(きみをしまたむ)」(11・2466)

【混合表記】以上の表記を混合した表記。読添えと単音節仮名表記の「今曾悔寸(いまぞくやしき)」(4・516), 同じく読添えと単音節仮名表記の「不有尔(あらなくに)」(11・2583), 読添えと多音節訓仮名表記の「乏雲(ともくも)」(7・1210) 漢字表記と単音節仮名表記の「有不勝自(ありかつましじ)」(4・610)。

【その他の表記】多音節音仮名での表記や熟合仮名での表記。「人毛不有君(ひともあらなくに)」(10・2321)／「辞鴛鴦将待(ことをしまたむ)」(11・2755)

### 3 実態と傾向

#### 3.1 補助動詞

『万葉集索引』は「います(四段)」「います(下二段)」「たまふ」「たぶ」「ます」「まうす」「まつる」の7語を補助動詞としている。このうち多音節訓仮名表記されることがあるものは「ます」のみである。以下に、補助動詞「ます」の多音節訓仮名表記を挙げる。挙例に際しては、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形をそれぞれ、未・用・終・体・已・命と省略し、今後も同様の方法で活用形を表示する。

- まさ(未) 事繁 君者不來益(きみはきまさず) 霍公鳥……(8・1499)  
 まし(用) ……昔見從 變若益尔家利(をちましにけり)(4・650)  
 ます(終) ……吾戀之 君來益奈利(きみきますなり) 紐解設奈(8・1518)  
 ます(体) 春山 友鴛 鳴別 眷益間(かへりますまも) 思御吾(10・1890)  
 ませ(命) ……裳不令湿 不息來益常(やまざきませと)……(9・1764)

補助動詞「ます」の表記の実態は【表1】のようである。〈漢字〉列には多音節訓仮

名と単音節仮名とはどのように関わりあっているのかといったことは、万葉集の「仮名」をとりまく問題のひとつとして考えられてよく、そのためには出現が豊富な多音節訓仮名について押さえる必要がある。こうした問題意識に基づき、筆者は拙稿（2015a）で多音節訓仮名表記されることがある単独の助詞について、拙稿（2015b）で多音節訓仮名表記されることがある語句について調査・検討してきた。本稿はそれらに続いて、万葉集において多音節訓仮名表記されることがある補助動詞・活用語尾・助動詞・助詞・接辞およびこれらの連続について、(1) 多音節訓仮名表記の実態 (2) 多音節訓仮名表記されやすいものの特徴について調査・検討するものである。以上2点についてみることによって多音節訓仮名の基礎的事柄を整理し、研究の基盤を整えることが本稿全体の目的である。

## 2 調査の方法

### 2.1 資料と対象

調査資料には、木下正俊（編）（2001）『萬葉集 CD-ROM 版』を用いる。調査範囲は『萬葉集 CD-ROM 版』の訓字主体巻であり、本稿でいう訓字主体巻は、巻1・巻2・巻3・巻4・巻6・巻7・巻8・巻9・巻10・巻11・巻12・巻13・巻16である。以下、『萬葉集』とするときは『萬葉集 CD-ROM 版』訓字主体巻のことである。

調査対象は、『萬葉集』において多音節訓仮名表記されることがある補助動詞・活用語尾・助動詞・助詞・接辞およびこれらの連続である。補助動詞は古典索引刊行会（編）（2003）『万葉集索引』が補助動詞とみなしているものである。助詞・助動詞は、原則として上代語辞典編修委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典 上代編』が見出し語として掲げているものとする。

### 2.2 表記の分類

本稿では多音節訓仮名表記の実態をみるにあたって計量的方法を用いる。そのため、補助動詞・活用語尾・助動詞・助詞・接辞およびこれらの連続の多様な表記のありかたを【多音節訓仮名表記】【漢字表記】【単音節仮名表記】【読添え】【混合表記】【その他の表記】に分類する。

【多音節訓仮名表記】1字で複数音節に対応する訓仮名での表記。「何時來益牟（いつかきまさむ）」（10・2271）／「事悔敷乎（ことくやしきを）」（2・217）／「立儀足（たちよそひたる）」（2・158）／「有勝益士（ありかつましじ）」（4・723）／「君尔有名國（きみにあらなくに）」（3・422）／「手駕取而者（てをしとりてば）」（7・1259）

【漢字表記】正訓や義訓での表記。正訓は補助動詞「ます」に対する「雲隱座（くもが

## 『萬葉集』における多音節訓仮名表記の実態と傾向

——補助動詞・活用語尾・付属語を中心に——

吉 岡 真 由 美

## 1 はじめに

万葉集を構成する素材としての文字を〈漢字〉とするとき、その用法には表語的用法である「漢字」と表音的用法である「仮名」とがある。用法としての「仮名」は、1字が1音節に対応する単音節仮名、1字が複数音節に対応する多音節仮名、2字以上で1音節以上に対応する熟合仮名の3つに大別でき、単音節仮名・多音節仮名は音仮名か訓仮名かによってさらに、単音節音仮名・単音節訓仮名、多音節音仮名・多音節訓仮名にわけることができる。

本稿で扱うのは、多音節仮名の下位分類にあたる多音節訓仮名である。多音節仮名の出現傾向や機能については、橋本(1966)によって、原則として訓字主体巻に出現すること、多音節訓仮名は多音節音仮名よりも出現が豊富であること、自立語よりも付属語と対応しやすく、付属語と対応する際には表音性が重視されていること、語的なまとまりや文節を明示する機能があることが指摘されており、これらは現在でもひろく支持されている。ただし、橋本(1966)の意図は多音節仮名の全体を俯瞰することにあるため、多音節仮名表記されることがある語の詳細や多音節仮名として出現する〈漢字〉については詳しく論じられていない。とくに多音節訓仮名については、橋本(1966)以後、寺島(1994)の人麻呂歌集を対象とした論考があるものの、万葉集を包括的に扱う論は管見のかぎりみられない。そのため、万葉集において多音節訓仮名が対応する語や多音節訓仮名として出現する〈漢字〉については、十分に整理されているとはいえない状況である。

多音節訓仮名を中心に据えた論が少ないのは、それが和訓を利用しているという点が重視され、訓仮名という枠組みのなかで単音節訓仮名とともに論じられてきたためである。しかし、単音節訓仮名は平安時代以降の平仮名・片仮名への連続面を内包しているのに対して多音節訓仮名はそれらとの連続面を持たない。単音節訓仮名と多音節訓仮名とはともに訓仮名でありながらも、その根本には異なる性質を持っていると考えられる。また、どのような条件が多音節仮名の出現を支えているのか、万葉集において多音節仮